

LIBER STUDIORUM

寺田寅彦

青空文庫

震災後復興の第一歩として行なわれたあさくさりようんかく浅草凌雲閣の爆破を見物に行つた。工兵が数人かかつて塔のねもとにコツコツ穴をうがっていた。その穴に爆薬を仕掛けて一度に倒壊させるのであつたが、倒れる方向を定めるために、その倒そうとする方向の側面に穴の数を多くしていた。準備が整つて予定の時刻が迫ると、見物人らは一定の距離に画した非常線の外まで退去を命ぜられたので、自分らも花屋敷はなやしきの鉄檻てつおりの裏手の焼け跡へ行つて、合図のラツパの鳴るのを待っていた。その時、一匹の小さなら犬が

トボトボと、人間には許されぬ警戒線を越えて、今にも倒壊する塔のほうへ、そんなことも知らずにうそうそひもじそうに焼け跡の土をかきながら近寄って行くのが見えた。

ぱつと塔のねもとからまっかな雲が八方にほとぼしりわき上がったと思うと、塔の十二階は三四片に折れ曲がった折れ線になり、次の瞬間には粉々にもみ砕かれたようになって、そうして目に見えぬ漏斗から紅殻色べんがらいろの灰でも落とすようにずるずると直下に堆た積いせきした。

ステツキを倒すように倒れるものと皆そう考えていたのであつた。

塔の一方の壁がサーベルを立てたような形になってくずれ残つ

たのを、もう一度の弱い爆発できれいにもみ砕いてしまった。

爆破という言葉はどうしてもあのこわれ方にはふさわしくない。今まで堅い岩でできていたものが、突然土か灰か落雁らくがんのようなものになつてそのままでするとたれ落ちたとしか思われな
い。それでもねもとのダイナマイトの付近だけはたしかに爆裂す
るので、二三百メートルの距離までも 豌えんどうだい豆大の煉瓦れんがの破片が一
つ二つ飛んで来て石垣いしがきにぶつかったのを見た。

爆破の瞬間に四方にはい出したあのまっかな雲は実に珍しいな
がめであつた。紅毛の唐獅子からじしが百匹も一度におどり出すようであ
つた。

くずれ終わると見物人は一度に押し寄せたが、酔狂な二三の人

たちは先を争って碎けた煉瓦の山の頂上へ駆け上がった。中にはバンザイと叫んだのもいたように記憶する。明治煉瓦時代の最後の守りのように踏みとどまっていた巨人が立ち腹を切って倒れた、その後に来るものは鉄筋コンクリートの時代であり、ジャズ、トーキー、プロ文学の時代である。

あの時に塔のほうへ近づいて行ったあの小犬はどうしたか。當時を思い出すたびに考えてみるのだが、これはだれに聞いても到底わかりそうもない。

こんな哀れな存在もあるのである。

ある日乗り合わせた丸まるの内うちの電車で、向かい側に腰をかけた中年の男女二人連れがあつた。男は洋服を着た魚屋さかなやさんとでもいった風ふう体ていであり、女はその近所の八百屋やおやのおかみさんとでも思われる人がらであつた。しかるに二人の話し合っている姿態から顔の表情に至つては全く日本人離れがしている。周囲のおおぜいの乗客はたつた今墓場から出て来たような表情であるのに、この二人だけは実に生き生きとしてさも愉快そうに応答している。それが夫婦でもなくもちろん情人でもなく、きわめて平凡なるビジネスだけの関係らしく見えていて、そうしてそれがアメリカの魚屋さんとアメリカの八百屋やおやさんのように見えるのが不思議である。

二人ともにあるいは昔からの活動写真、近ごろの発声映画のフアンでももあるかとも考えてみた。そうとでも仮定しなければ他に説明のしかたのないほどに、あく抜けのしたヤンキータイプを見せていた。

喫茶店きつさてんなどで見受ける若い男女に活動仕込みの表情姿態を見るのは怪しむまでもないが、これが四十前後の堅気な男女にまで波及して来たのだとすると、これはかなり容易ならぬ事かもしれない。

天平時代てんぴょうじだいの日本の都の男女はやはりこういうふうにして唐とうや新羅しんらぎのタイプに化して行ったのかもしれない。

書店の二階の食堂で昼飯を食いながら、窓ガラス越しに秋晴れの空をながめていた。遠くの大きな銀行ビルディングの屋上に若い男が二人、昼休みと見えてブラブラしている。その一人はワイシャツ一つになって体操を試みたり、駆け足のまねを試みたり、ピッチャーの様子をしたりしている。もう一人は悠ゆう然ぜんとしてズボンのかくしに手を入れ空を仰いで長ちよう嘯しよう漫歩しているふぜいである。空はまつさおに、ビルディングの壁面はあたたかい黄土色に輝いている。

こういう光景は十年前にはおそらく見られないものであつたら

う。この二人はやはり時代を代表している。

ジャズのはやるゆえんである。

四

一週に一度永代橋えいたいばしを渡つて往復する。橋の中ほどから西寄りの所で電車の座席から西北を見ると、河岸かしに迫つて無骨な巖がんじよ丈うな倉庫がそびえて、その上からこの重い橋をつるした鉄の帯がゆるやかな曲線を描いてたれ下がっている。この景色がまたなぐ美しい。線の細かい広重ひろしげの隅田川すみだがわはもう消えてしまった代わりに、鉄とコンクリートの新しい隅田川が出現した。そうして

それが昔とはちがった新しい美しさを見せているのである。少し霧のかかった日はいつそう美しい。

邦楽座わきの橋の上から数寄屋橋すきやばしのほうを、晴れた日暮れ少

し前の光線で見た景色もかなりに美しいものの一つである。川の兩岸に錯雑した建物のコンクリートの面に夕日の当たった部分は実にあたたかいよい色をしているし、日陰の部分はコバルトから紫まであらゆる段階の色彩の変化を見せている。それにちりばめた宝石のように白熱燈や紅青紫のネオン燈がともり始める。

白木屋しろきやで七階食堂の西向きの窓から大手町おおてまちのほうをながめた

朝の景色も珍しい。水平に一線を画した高架線路の上を省線電車が走り、時に機関車がまっ白な蒸気を吐いて通る。それと直交し

弓なりに立つて見える呉服橋ごふくばし通りの道路を、緑色の電車のほかに、白、赤、青、緑のバスが奇妙な甲虫コレオプテラのようにはい上りはいおり行きちがつている。遠くにはお城の角櫓すみやぐらが見え、その向こうには大内山おおうちやまの木立ちが地平線を柔らかにぼかしている。左のほうには小豆色あずきいろの東京駅が横たわり、そのはずれに黄金こがねい色の富士が見える。その二つの中間には新議会の塔がそびえている。昔はなかつたながめである。百年前に眠ったままで眠り通し、そうして今この窓で目ざめたとしたら……。いつもこんなことを考えながら一杯のコーヒーをすするのである。

震災前の東京は、高い所から見おろすと、ただ一面に鈍い鉛のような灰色の屋根の海であった。それが、震災後はいったいにあ

たたかい明るい愉快な色の調子が勝つて来た。それと同時にそういう所で仰ぎ見る空の色が以前よりも深く青く見えだしたような気がする。これはコントラストのせいであろう。これほど著しい色彩の変化が都人の心に何かの影響を及ぼさないはずはないという気がする。

実際は東京の空気は年々に濁るはずである。自動車のガソリンの煙だけでも霧の凝縮核を供給することはたいしたものである。寒い曇天無風の夜九段坂^{くだんざか}上から下町を見るといわゆるロンドンフオツグを思わせるものがある。これも市民のモーラルを支配しないわけにはゆかないであろう。

五

上野のデパートメントストアの前を通つたらひろこうじ広小路側の舗道に幕を張り回して、中に人形が動いていた。周囲に往来の人だかりのするのを巡査が制していた。なんとなく直感的にその幕の中には人が死んでいそうな気がしたが、夕刊を見るとやっぱり飛び降り自殺であつた。あまり珍しくないそれであつた。

それから数日後にまた同じ屋上庭園から今度は少しばかり前とちがつて建物の反対側へ飛んだ女があつた。そうして庭園はついに閉鎖された。

また数日たつて某大学の構内を通つたら壮麗な図書館の屋上に

立ってただ一人玄関前の噴水池を見おろしている人がある。学生であるか巡視であるか遠いのでよくわからなかったが、少し変な気持ちがあった。その後さらに数日たって後、同じ大学の中央にそびえた講堂の三階から飛んだ学生があったという夕刊記事を読んで、また変な気持ちがあった。この終わりの自殺者と、前の図書館屋上の人とはおそらくなんの関係もないかもしれないが、しかし自分の頭の中では前後四人の「屋上の人」がちやんと一つの鎖でつながれている。

おくびようもの
臆病者の常として自分もしばしば高い所から飛びおりることを想像してみることもある。乾坤けんこん一擲いつてきという言葉はこんな場合に使ってはいけなだろうか、自分にはそういう言葉が適切

に思い出される。飛びおりてしまえば自分にはその建物もその所有者も、国土も宇宙も何もかも一ぺんに永久に無くなるのだから、飛ぶ場所の適否の問題も何もないであろうが、他の人にはやっぱり世界は残存しその建物と事件の記憶は残るであろう。

また数日たって後の雪のふる日、ある婦人がその飼っていた十じ姉妹ゆうしまつの四羽とも一度に死にかかったのを手のひらへのせて一生懸命火鉢ひばちで暖めていた。見ると、もう全く冷たくなってしまっている。しかし、「たとえばだめでもそうしないと気がすまない」のだという。「人間が死んだらお経をあげると同じじやありませんか」とその人はいう。

こういう唯心論者もまだ少しはいるのである。

六

ある大学講堂の前へ突き当たって右の坂道へおりようとする曲がり角に、パレットナイフのような形の芝生しばふがある。きちようめんかどにちやんと曲がり角を曲がってあるくのと、その芝生の上を踏みにじって行くのとは、歩く距離にすれば三尺とはちがわない。しかし多くの人がある三尺の距離の歩行を節約すると見えて芝生がそこだけ踏みつぶされてかわいそうにはげている。この事を人に話したら、それは設計が悪いのだという。そんな所へ芝生をこしらえるのが間違っていると云われてなるほどそれもそうかと思

った。

うえのたけ だい
上野竹の台の入り口に二つ並んで噴水ができた。その周囲の芝生に立ち入るなど書いた明白な立て札はあるが、事實は子供も大供も中供もやはり芝生に立ち入って水の面をのぞかなければ気が済まないのである。これもたしかに設計が悪いと言われなければならぬのがいわゆる時代の推移であろう。二十年前だったら、設計も立て札も当然自明的であつて、制札を無視するのが没公徳的で悪いのであつた。

自分の郷里では、今は知らず二十年も以前は、婚礼の三々九度の杯をあげている座敷へ、だれでもかまわず、ドヤドヤと上がり込んで、片手には泥どろだらけの下駄げたをぶら下げたままで、立ちはだ

かつて花嫁や花婿の鼻の高低目じりの角度を品評した。それを制すれば門の扉とびらの一枚ぐらい毀こぼたれても苦情は言えなかつた。これはむしろ一九三〇年を通り越していたとも考えられる。

今度法令が変わると他人の家へうっかり黙つてはいつて来るものにはピストルを向けてぶつ放してもいいことになるという話である。これは芝生しばふの場合とは逆の方向への推移である。もつともアフリカ内地へでも行けば、今でも、うっかり国境へ入り込んで視察でもしていたというだけでもすぐ拘禁され、場合によると命があぶない所もあるかもしれない。

これらの事実の関係ははなはだ錯綜さくそうしていて、考えても考えても、考えが隠れん坊をして結局わからなくなるのである。時代

は進むばかりであとへはもどらないはずであるが、時代の波の位エース相のようなものはほぼ同じことを繰り返すのかもしれない。しかしただ繰り返すだけではなくて、やはり何かしらあるものの積分だけは蓄積してゐるには相違ない。そうしてその積分されたものの掛け値なしの正味はと言えば結局科学の収穫だけではないかという気がする。思想や知恵などという流行物はやりものはどうもいつも一方だけへ進んでゐるとは思われぬ。

七

妙な夢を見た。大河の岸に建った家の楼上にいる。どういいうわ

けかはわからないが、この自分はもう数分の後には、別室に入つて、自分からは希望しない自殺を決行しなければならぬことになつてゐる。その座敷というのがこつちからよく見える。大きな川に臨んだ見晴らしのいいきれいな部屋へやで、川向こうに見える山は郷里の記憶に親しいあの山である。だれとも知れず四五人の人々がそばにいておし黙つてゐる。五分、三分、一分いよいよ時刻が迫つたのでずつと席を立ててその別室へはいつた。その時までには死ぬことに対しては全く平氣でいたのが、そこへすわつた瞬間に急に死ぬのがいやになつた。それはちようど大河の堤を切り放したように、生命への欲望が一度に汎はんらん濫した。と思うと大きな恐ろしいなり声のようなものが聞こえて目をさました。

二三日前にある友人とガリレーやブルノやデカルトの話をした。そうして、学説と生命とをてんびん天秤にかけた三人が三様の解決を論じた。その時に頭を往来した重苦しい雲のようなものの中に何かしらこういう夢を見させるものがあつたかもしれない。

ブルノは学問と宗教と生命とを切り離す事ができなかつた。デカルトではこれがデイフェレンシエート分化エートされていたように見える。ガリレーはその二人の途中に立つて悩んでいたのであらう。

この夢を見た夜は寝しなしよくにほんぎに続日本紀を読んだ。そうしてたちば橘な奈良麻呂のらの事件にひどく神経を刺激された、そのせいもいくらかあつたかもしれない。おくびようもの臆病者はよくこんな夢を見る。

(昭和五年三月、改造)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第二卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年9月10日第1刷発行

1964（昭和39）年1月16日第22刷改版発行

1997（平成9）年5月6日第70刷発行

入力：(株)モモ

校正：かとうかおり

2003年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

LIBER STUDIORUM

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>